

2023年3月26日

「隅の親石」

ルカによる福音書 20:9-19

松井直樹神学生

この例え話にある人とは、神様であり、ぶどう園とは、イスラエルの国土であり、農夫とは、イスラエルの国民であり、長い旅というのは、イスラエルの長い歴史であり、僕とは、イスラエルの預言者である。

しかし、それは、必ずしもイスラエルの民にとっては、好ましい存在でなかった。第2イザヤもエレミヤも最後に登場した主イエスも同様である。

私が受洗した時に会った言葉も「隅の親石」である。受洗したのは大変に遅くて50代の頃であり、きっかけは、6人家族の末っ子の私以外の家族は、皆、天に召されたが、母が自宅の木材を近くの三鷹教会に寄付したため、教会が身近となり、修養会の講師にきた恩師の関田寛雄先生と再会し受洗した。

ルカを1章から読む受洗準備の時に、仕事が福祉関係だったことから「隅の親石」をその福祉の仕事の意味と重ね合わせて理解した。十字架のキリストと結ばれる「受洗」も私の人生にとっての「隅の親石」である。

私たちは、それなりに人生を送っている。しかし、その人生設計に問題点がある。それは、自分の根柢を支えるべきものを確かめていないからである。イエスが律法学者たちに言ったように、私たちもまた、人生の大事な「隅の親石」を捨てたままにして、一生懸命に柱を建てたり、壁を塗ったりしている。

私を受洗に導いてくれた関田先生は、昨年12月に94歳で天に召された。先生の読書会の最終回が『赤ひげ』であった。その意味は（それは）「決して徒労ではない。神の働き的一部分を、担わされているのです。部分で終わるかも知れない、未完成で終わるかも知れない、それでいいのだ。何故ならば、結論はやがて神様が出して下さる。」というのが先生の遺言であった。